
love song -**あいのうた**-

衣川 蛍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

love song - あいのうた -

【Nコード】

N0447X

【作者名】

衣川 蛭

【あらすじ】

――蘭、ごめんな…。―― 烏を追う日常の中、それでも小さな思い出ひとつひとつに笑顔があふれていて、とても幸せだった。みんなともっとたくさん思い出を作りたかった。そして、大好きな人とずっと一緒にいたかった…。 名探偵コナン史上最も純粋なラブストーリーが今、始まるうとしている。 感動をいっぱい届けたい。CPは原作重視。 ショッキングな内容が含まれているので15歳以下の人は自己責任でお願いします。

00（前書き）

初の連載小説です！

ストックを貯めてる状況なので、

とりあえずプロローグだけの投稿とします！

00

「コナンくん…元気ですか？そっちは、どんな天気ですか？」

一人の女性が呟いた。

「早いね、もう10年が経ったんだね。あれから、キミはどんな気持ちでいますか？
どんな顔をしているの？」

女性は空を仰いだ。瞳に空を映し、だんだんと潤んでいくその綺麗な瞳から、一粒の雫が落ちた。

「ねえ…、どこにいるの？何を考えて、どんな表情をしているの？
…今度はいつ、会えるの？」

あとからあとから溢れる涙を、もう誰も止められない。

「ねえ、新一…。会いたいよ」

女性は最後にこう言い残したきり、もう何も言えなかった。

そして、彼女の長い1日が始まる。

少年はいつも自分勝手だった。

自分のことを棚に上げ、他人のことばかりを気にして、いつも周りばかり守ってきた。

そんな少年に、ある女性が言った一言によって、彼の運命が変わった。

「キミは、どうしてそんなに自分勝手なの？キミが守るべき相手は、他人じゃなくて自分だってこと、どうしてわからないの？キミが私たちを守るのなら、誰がキミを守るの？キミは、誰に抱きしめてもらうの？」

いつ、涙を流すの？」

少年は大きく目を見開き、その瞳から誰も見たことがない、彼の雫がこぼれおちた。

いったん溢れだしたそれは、もう止まることなく流れ続け、あとからあとからボロボロと溢れだす。

それは、彼が初めて人を必要とした瞬間だった。

「じゅめん、なさい……」

少年は、蚊のなくような小さな声で呟いた。そして、彼女の腕につつまれ、ゆっくりと瞳を閉じた。

彼女はそっと、でも力強く抱きしめた。両手で、小さな身体を頭を、腕を、優しく包み込んだ。

「もう誰も、貴方を一人にはさせないから。貴方は一人じゃないから。」

ずっと、そばにいるから……」

彼女の言葉、ひとつひとつが彼の中で溶けて、浸透していった。そして堅く硬直していた心が、身体が、欲していた安らぎを受け入れ始め、ほぐれていく。

「……ありがとう」

その言葉と共に、静かに微笑んだ。

00（後書き）

次話はもうしばらくかかりそうです。

1・2週間以内にはストック6話分くらい
貯めるのを目標にして頑張りますので、
応援よろしくお願いします（＊、＊、＊）

01（前書き）

今日でストックが3話分出来ました。
プロローグだけっていうのは何だか
寂しい気もするので、

出血大サービスで↑おいw

うpしちゃいます（*´、*）www

「江戸川君、どうかしたの？」

帝探小の教室内で机にうな垂れるメガネの少年を見て、茶髪がかったウェーブの少女が声をかけた。
江戸川君、と呼ばれたその少年はゆっくりと顔を上げ、細々と答える。

「いや、なんでもねえよ……」

「なんでもないわけではないでしょう。何だか疲れているみたいだし」

気だるそうに答えた少年——いや、コナンに向かって、まるで奥さんのように鋭くつつこむ少女、哀。

コナンは再びうな垂れ、めんどくさそうに呟く。

「寝不足なだけだよ……。少しだけ、頭も痛えけど……ほっときやすぐ治るって」

「そう。それならこんなところで寝ないで、保健室に行くなり帰る

なりしたらどうなの？あの子たちだって心配するじゃない」

哀がいう、”あの子たち”は案の定、遠くの方からコナンの様子をじーっと眺めていた。

肩まで伸びた力チューシャの女の子、そばかすのつぽの男の子、そしてぼっちゃりを通り越した体系のガキ大将風の男の子——歩美、光彦、元太だ。

「なんだか、やつれてません？コナンくん……」

「ああ、俺も思ったぜ。少し痩せたよな？アイツ」

「うんうん……大丈夫かなあ、コナンくん……目の下にクマもできてるし」

3人はこそこそと集まって話をしていた。そんな3人を見たコナンは苦笑し、立ち上がった。

「おい、おめーら。こっち来いよ」

コナンに呼ばれていそいそと集まってくる3人は口々に漏らす。

「やっぱりコナン君、近くで見たら尚更だよ！」

「そうですよ、今にも倒れそうじゃないですかっ！」

「お前、今日はもう帰った方がいいんじゃないか？」

そんな子供たちの言い分を、今日は素直に聞いてやろうと思ったコナンは、無言でロッカーから自分のランドセルを持ち出し、教科書やら筆箱をしまい始めた。

「ああ、そうするよ。心配かけて悪いな……。んじゃ、バイバイ」

そう言い、ランドセルを背負ったコナンは早々と教室を後にした。

探偵団はそんな素直すぎるコナンの後ろ姿を、黙って見送ることしかできずに、ぼーっと眺めていた。

教室から出たコナンは小林先生に早退する旨を伝えたあと、校舎を後にした。

「あー痛え…、なんなんだよこの頭痛は…だりー」

コナンはぼやき、右手でこめかみを押さえた。

ガンガンとした痛みと共に加えて耳鳴りもし始めた、この感覚。コナン自身、少し戸惑っていた。

探偵事務所までの距離が、普段よりずいぶん長く感じる。一瞬、視界がぶれた気がしたコナンは、壁に手をついた。

「…え、ちょ、何だ？この感じ…」

得体のしれない感覚に耐え切れず、その場にしゃがみこんだ。

体育座りをして足の間に頭を埋めこみ、だんだんひどくなる頭痛に顔をしかめる。

途端に今度は胸の奥から何かがこみ上げてくるような変な感覚がして、食道が熱く、思わず口を押さえた。

「うつ…く」

ぐわんぐわんとした眩暈と、突然の吐き気に動揺しまくったコナンは、しばらくの間その場から動くことができなかった。

01（後書き）

さて、コナン君はどうなってしまっくんでしょうかねえ（*。
*）
ぐへへw↑

すいません…w

…私って本当に鬼だなんてつくづく思っています（笑）

この後の話はまた近々upしますので、
気長にお待ちくださいな（*ゝwゝ*）

では（*^^*）ノシ

02（前書き）

さて、2話目の投稿です（＊、＊、＊）
場面が変わり、小学校の彼らの登場ですよ。
お楽しみにっ

「コナン君、大丈夫でしょうかね。一人で帰らせてしまいましたけど...」

教室では残された探偵団が輪になって会議をしていた。その中で中心になった哀は何やら真剣な表情で腕を組み、考え事をしていた。光彦はコナンを一人で帰らせたことを少し後悔しているようで、思わず呟いた。

「そうね...彼、今日はやけに素直だったしね。最近、顔色も優れないし、何かあったのかしら」

「アイツ、一昨日ぐらいから調子悪そうだな!」

「そうそう!昨日なんて大好きなサッカーだったのに見学してたし...。歩美、心配で次の授業集中できないよ」

元太と光彦も歩美と同じことを考えていたようで、首をぶんぶんと縦に振った。

「そうなの？私、昨日は休んでいたから…江戸川君、どんな様子だった？」

哀は昨日、博士が腰を痛めたため看病をしなくてはならなかったのが学校を休んでいた。サッカーが大好きなコナンが見学をするほど体調を壊していたことなど、知るよしもなかった。

「えつとね…体育が始まる前の着替え時間に、すごい顔色が悪くなつたんだよ。ね？元太君」

「ああ。んで俺、アイツに声掛けたんだけどよ、真つ青な顔で大丈夫とか言うから、保健室に無理矢理連れてつたんだ」

「そうそう。コナン君、抵抗もできないくらいに体調が悪かったみたいで、今日みたいに素直に連行されてたんで僕、びっくりしました！」

昨日の様子を事細かに哀に伝える探偵団の3人。哀はその様子を頭の中でイメージする。そんなコナンなんて想像もつかないし、何か嫌な予感がした。

哀はその予感を確かめるため、勢いよく立ちあがった。

「ねえ、私も今日は早退するわ」

「ええー！じゃあ俺たちも行くぜ！」

案の定元太たちも同じように立ち上がる。
哀はそんな3人を諭すように言葉を選んだ。

「貴方達はこのままここにいなさい。少年探偵団が揃って早退だなんて、小林先生がさせてくれるわけないでしょ？私が江戸川君をちゃんと病院まで連れて行くから、ここは私に任せて。お願い」

哀の真剣な頼みに3人は頷くことしかできなかった。

ロッカーからランドセルを持ち出した哀はコナンと同じように教室を出て校舎を後にした。

哀は探偵事務所の方向へ走り出す。

と、電柱の陰に小さな人影が見えた。その陰は間違いなくコナンだった。彼は小さい身体を丸めて、少しも動こうとしなかった。

「工藤君っ！！！」

哀はコナンの元に素早く寄り添い、背中をさすった。
コナンはゆっくりと顔を上に向け、哀を見つめた。

「灰原…おめー、学校はどうしたんだよっ…っっ」

上を向いたときに、また景色が揺れて吐き気が伴ったらしい。
コナンはまた俯き、顔をしかめる。

「嫌な予感があったのよ。帰る途中で死んでたらどうしようってね。」

哀はふっと笑う。コナンはその不気味さに苦笑しながら、

「人を勝手に殺すなよ…、ったく」

と呟いた。

「とりあえず、博士ん家に行くわよ。貴方の身体、徹底的に調べなきゃ」

コナンは一瞬ぎょっとしたが、対抗できるほどの体力がなかったため仕方なく従うことにした。
数分後、少し落ち着きを取り戻したコナンはゆっくりと立ち上がり、歩き出した。

「大丈夫なの？ねえ、いつからそんな体調なの？」

哀は珍しくコナンを気遣う。

「わりい…博士ん家着いたら話すから。今はちょっと…」

コナンはそう言い、黙り込んでしまった。

話すとまた自分の声が頭に響き、気持ち悪くなってしまったため、今は極力話したくなかったらしい。
哀はそんなコナンの様子に少し不安になったが、いずれにしても博士の家に着かない限りどうしようもないことなので、コナンの歩み

に合わせてゆっくりと歩を進めた。

02（後書き）

コナンと哀のコンビいいですよね。
書いてて楽しいです（笑）

原作中の2人は
見た目完璧に夫婦ですwww

では次回もどうぞ、お楽しみ♪

03（前書き）

小説って難しいですね；

会話はなんとか書けるんですが、

会話と会話の間の、情景を表現するのが

特に難しい><

でも頑張りますよっ ♪（笑）

「博士、ただいまー」

いつもより大幅にかかった博士の家までの道のり。

博士はずいぶんと早かった哀の帰りと、一緒にいるコナンの様子に驚き、ばたばたと走ってきた。

「あ、哀君！なんでこんなに早いんじゃ。それに新一っ！どうしたんじゃ…顔が真っ青じゃぞ！」

博士は、「とりあえず上がりなさい」と2人を家に入れ、真っ先にコナンを抱き上げた。

ソファに横にならせ、タオルケットをかぶせる。

コナンは博士の手際の良さに少し驚いたが、大人しくソファに身体

を預けた。

そして、そのままゆっくりと目をつぶり、眠った。

哀はそんなコナンの浪漫的動きに不安が募る思いがした。

「哀君…、新一は風邪でもひいたのかのお」

博士は眠っているコナンを見つめながら呟いた。

哀はコーヒーを飲みながらコナンが目覚めるのを待っている。

「いいえ。この症状は風邪じゃない。きっと何か隠しているはずだわ。起きたら白状させなきゃ」

「だが哀君…、ほどほどにするんじゃないぞ。あまり追い詰めると悪化するかもしれないし…」

博士は哀の気迫に少々戸惑い、苦笑いした。
哀はその博士の気持ちを察したのか、同じような表情で答える。

「ええ。彼の体調も見ながら、ゆっくり聞くつもりよ。このもやもやが晴れるまで、無茶はさせられないしね」

そして、言い終わると同時に哀の目の色が変わった。
それは、何かを決意した証だった。

外は赤みがかったていた。とつくに学校も終わっている時刻。哀は携帯の電話帳を開き、毛利探偵事務所の番号を探す。表示された番号に電話をかけ、数回のコール音の末、元気な女性の声が聞こえてきた。

「はい、毛利探偵事務所です」

この声を聞くと、なぜだか泣きたくなる。彼女と話すと、どうしても姉のことを思い出してしまい、切なくて胸が苦しくなる。だが、今はこの彼女に伝えなくてはならないことがある。

「あの、灰原哀です」

電話の向こうにいる彼女は、かけてきた相手の意外さに思わずテンションが上がったようである。

「哀ちゃん！どうしたの？あ、コナン君なら、まだ帰ってないんだけど……」

「あ、いや。江戸川君、ちょっとしばらく博士の家に泊まるから、その連絡を蘭さんにしようと思って電話したの。じゃあそういうことだから…」

一刻も早くこの電話を切りたかった。これ以上、彼女の声を聞きたくない。

「あ、待って哀ちゃん。コナン君に代わってくれる？」

「ごめんなさい。彼、今博士の作ったゲームに集中してて…出れる状況じゃないの」

哀は用意していた科白と淡々と言う。蘭は盛大な溜め息をついていた。

「まったくもう…じゃあいいわ。哀ちゃん、コナン君に、「ゲームにハマるのはいいけど、ほどほどにしないさいよ！」って伝えといてくれる？あ、それから、明日は帰ってくるよう言ってね！それじゃあ」

蘭は哀に無難な伝言を任せたと電話を切った。

哀は軽く息を吐き、受話器を置いた。コナンの様子を見ようとソファに駆け寄ると、思わず息をのんだ。

——コナンの寝顔が、あまりにも可愛かったから。

哀の頬がほんのりと朱色に染まった。可愛いだなんて思った自分の気持ち在必死にごまかすため、哀は地下室へと走る。

博士はそんな哀の様子を見て、頬を緩め、ふっと笑った。

03（後書き）

今回は少し短くなってしまいました><

ではまた次話で♪

04（前書き）

今回は蘭ちゃんが登場します♪
お楽しみに（＊´ω´＊）

「ん…」

あれから約2時間が経ち、コナンはいつの間にかソファから寢室のベッドへと移動させられていた。

目が覚めて、一瞬どこにいいのか分からなかったが、周りを見渡すと幼いときの自分とまだ黒々としたふさふさの髪が生えている若い博士とのツーショット写真が視界に入り、ここがどこだか気付いた。そして次に気になったのは現在の時刻。身体をゆっくりと起こし、時計を見る。

「え、19時37分って…。俺、いつから寝てたっけ？」

けれど、久しぶりに一度も夢を見ないまま起きることができた。頭もすっきりしている。

布団をめくり、ゆっくりと立ち上がった。

「…ふう」

少しフラついたが、眠る前と比べたら今の方が断然調子がいい。
そのまま寝室から出て、博士と哀のもとへ向かった。

「博士、灰原…」

リビングへ行くと、そこにはテレビを見る2人の姿があった。

「新一！」

「工藤君…」

2人は揃って駆け寄り、コナンの身体を気遣った。

「とりあえず、座りなさい。コーヒーでいいかしら？」

「ああ、さんきゅ……」

哀は何も言わず台所へコーヒーを取りに向かい、コナンはソファに腰掛け、またも体育座りをし頭を膝の上に乗せた。

そんな様子を見た博士は心配になり声をかける。

「新一、大丈夫か？座っているのが辛いなら横になってもいいんじゃないよ」

「ん。大丈夫……寝起きだから眠いだけだよ」

そこへカップを持った哀が鋭くつつこみながらコナンにコーヒーを手渡した。

「博士の言う通りよ。辛いならずっと寝ていなさい。はい」

「さんきゅ。でもそついうわけにはいかねーんだよ」

コナンはコーヒーをひとくち飲んだ。哀が淹れるコーヒーはいつも美味い。コナンと哀は完全なるブラック派だ。

「ねえ、今だいぶ落ち着いているようだから聞いてもいいいわよね？」

哀がコナンを鋭く見据えて言った。

「ああ」

コナンの返事を合図に哀の診断が始まった。

所変わって、ここは毛利探偵事務所。

蘭は哀からの電話を切ったあと、探偵で父親の毛利小五郎に向かって説教をしているところだ。

「お父さんっ！いい加減にしてよねっ！」

「っだーうるせえなー。いいじゃねーか、もう1本ぐらい…」

「良くないわよ！どれだけ飲めば気が済むのよ…。だいたいお父さんはねー！」

説教を受けている小五郎の周りにはビールの缶と焼酎の瓶が転がっている。人探しの依頼で動きまわった小五郎は風呂上がりにビールを飲んでから約2時間、ずっと飲みっぱなしだった。

腹になにも入れぬまま飲んだことを心配に思った蘭は、酒を取り上げ、こうして説教をしている。

「せめて何か食べてから飲みなさいっていつも言ってるでしょ！悪酔いしても知らないんだからね！」

「んもお、蘭ちゃん怖あーい！」

蘭のこめかみから血管が膨張したような、何かが切れたような、すごい音になった。小五郎はようやく今の自分におかれている状況に気づき、その途端酔いがまわり火照っていた顔面からは血がひけ、だんだん青くなっていく。

「ら、蘭！いい、いいいい今は冗談だぞ！？わ、分かった、今日はこれでやめておくから…ね、だから…あれだけはよせっ！」

蘭は、拳を震わせ、腹の奥から気合と苛立ちを込めた太い声を出している。

そして、「はあっ！」という掛け声と共に、蘭の足が小五郎の顔面ギリギリのところまで止まった。

小五郎は全身から汗がとめどなく噴出しているのを感じながら、それでもしばらくは動けずにいた。

「…わかったならさっさと片付けてよね」

蘭は黒いオーラを発しながら小五郎に静かに言い放つ。

「はひっ…わかりまひた」

小五郎は口が回らず、何を言ってるか分からなかったが、蘭からようやく解放されて身体の力が抜けて、その場に崩れた。

その後、何事もなかったかのように台所に立つ蘭の顔は、日頃の鬱憤が晴れたのか少し明るくなっていた。

04（後書き）

いかがでしたか？ 蘭ちゃんと小五郎の絡みも個人的に大好きですw w
では次回もお楽しみに（*´ω`*）

05 (前書き)

今回のコナンくんは結構素直ですw
ちよっただけ悪化させちゃったりもして…w

「えつと…」

コナンは哀に言われてここ最近の体調について話している。
哀の隣には博士がパソコンでコナンのカルテらしきものを作っている。

「円谷君たちが昨日、貴方がサッカーを見学していたって言うけど、その辺りはどう？本当なの？」

知られなくなかったようで、コナンは一瞬顔をひきつらせた。

「あ、ああ…。あんときはなんか眩暈がして、周りの声が聞こえなくなっただけ…。元太の声がなんとなく聞こえた気がするけど、あのときの記憶は曖昧なんだ」

「そう…。体調が悪くなったのはいつ頃からなの？」

段々細かく聞いてくる灰原を若干苦虫をつぶしたような顔で見つめるコナン。だが哀の真剣な表情を見て、こいつには隠さず全て話そう、と決めた。

「先々週の日曜から」

「それで？最初はどんな症状だったわけ？」

「頭痛だよ。こめかみのこの辺りが痛み出して…。最初は寝不足か何かだと思って得に気にはしてなかった」

哀は足と腕を組みなおす。

「…頭痛の痛み方とか、毎回同じだったりしない？」

コナンは思い当たるのか、一瞬はっとしたような表情になり、哀は

それに気付く。

「その顔…、思い当たるのね。どんな痛みなの？」

「なんかこう…内側から押されてるような。最初、頭痛が始まるときに1回ズキッてのが来て、そこからガンガン何かで殴られてるみたいな感じ。それが1時間くらい続く」

哀はその痛みを想像して顔をしかめた。

「キツイわね。それで？頭痛の他に何か違う症状はないの？」

コナンは少し俯く。

「どづしたの？」

哀は急に黙り込んだコナンを下から覗きこみ、表情を確認しようとした。

「ん…なんでもねえ。違う症状だよな…ああ、あるよ」

コナンは軽くこめかみを押さえている。またあの頭痛が始まっているようだ。哀はそのシグナルに気づき、質問をやめた。

「…続きはまた明日聞け。頭、痛むんでしょ？少し休みなさい」

「…あ、ああ。悪いな…さんきゅ」

コナンは痛みで目を堅くつぶる。

横になったとたん、両手で頭を抱えだし、そのまま動かなくなった。

「工藤君？大丈夫？」

「…っ。だ、だいじょぶ…すぐ落ち着くから…。っく…」

相当痛いらしく、言葉も途切れ途切れになる。
すると、今度は胸を押さえた。

「工藤君！しっかりして！胸が痛いの！？」

「こ、これも…すぐ落ち、落ち着く…くあっ」

哀は何も出来ず、ただただコナンのこの“発作”とも言える症状がおさまるのをひたすら待つことにした。

発作が起きてから約10分後。

コナンはだいぶ落ち着いているようで、こめかみはまだ押さえているが途切れ途切れだった言葉も正常に戻り、ただ息をするのが少し困難なのか肩を上下に揺らしながら呼吸をしている。

「工藤君、さっき胸の痛みもすぐ落ち着くって言ったわよね？さっき言おうとした症状って、この胸の痛みのこと？」

コナンは片目を薄く開き、哀を見つめる。
そして小さな声で話し始めた。

「胸の痛みは…、一昨日からだよ…。夜…、頭痛に耐えてたら寝たあとに布団の中で…。あと、5日前の夜は、熱が出て…」

コナンは思い出せるだけの症状を話した。哀の顔はどんどん険しくなっていく。

「熱も出たの!?!」

「ああ…。蘭たちにはバレてないけどな」

そう言っただけで悪戯っぽい笑顔を見せた。
哀は呆れて鼻で笑う。

「わかったわ。とりあえず、今日はもう寝なさい。あと、貴方気づいてないでしょうけど、今もたぶん熱があるはずよ。頭痛もおそらくその発熱が原因ね」

コナンは自分の額を触って確認する。たしかに少し熱い気がした。

「情けねえー…」

「何言ってるの。体調不良なんて誰にも起こることよ。博士、寝支度するの手伝ってあげてくれる？」

「ああ。構わんよ。ほれ新一、パジャマ持ってきたぞ」

博士が手にしているパジャマはコナンが幼少の頃、博士の家に泊まる際に来ていたパジャマだった。ベースは水色で、白の水玉模様のシンプルなデザイン。

コナンは博士に付き添われて着替えをし、ベッドに静かに横たわり、数分もしないうちに眠りについたのであった。

一方その頃、某廃墟ビルの倉庫では怪しげな黒服に身を包む2人の男がいた。

「…アニキ、ボスから例の工藤ってガキの情報が入りやした。アニキの読み通りでしたよ」

「フン…、やはり例の東京タワーの鼠か。ウオツカ、気にするな。奴は近いうちにくたばる。組織が手を下すまでもない…。」

黒いサングラスで太め体系の男と銀髪長身の男。

―ジン、ウオツカ。

ウオツカはジンの言っている言葉の意味がよく分からなかったのか首をかしげる。

「あ、アニキ…、くたばるって…どついうことですかい？」

「黙れ、ウォッカ。そのうち説明してやる」

ジンはそう言つと愛車のポルシェ356Aに乗り込んだ。

「フン…だが、鼠の近くに思わぬ産物がくつついているとはな」

口角を持ち上げ、不気味な笑みを浮かべる。

ウォッカもジンの後に続き車に乗り込むと、ジンは勢いよくアクセルを踏んだ。

「歓迎するぜ、シェリー……」

黒い2人の鳥を乗せたポルシェは、米花町へと向かった。

05（後書き）

ああーついに組織が！

さて今後の展開はどうなるのかな？（笑）

最近感想とかメッセとかいただくことが増えたので

そのたびに舞い上がっている作者www

やっぱりこういう喜びが

執筆意欲を高めますね（*´ω`*）

今後ともよろしく願います♪

06（前書き）

医療については少し知識があるので
ちよこつとだけ入れてみました（笑）
ということとは…？w
どうぞ、お楽しみください（*´、*´）

次の日の朝。

コナンは博士や哀よりも先に目を覚ました。

だが昨日の発熱がまだ続いているのか、頭が重く起き上がるには少し時間がかかると判断したコナンはもうしばらく横になっておくことにした。

「熱いな…なんかクラクラするし…」

頭や身体が熱く、目を開けると景色が揺れるうえに二重に見えた。発熱しているのに起きているせいか、目覚めた時よりも熱が上がっている気がした。コナンは気だるそうに布団をめくり、ゆっくりと起き上がって体温計を探しに部屋を出た。

コナンの額から汗が滴り、頬は赤く紅潮し、目は虚ろで肩を上下に揺らしハアハアと苦しそうに呼吸をしている。

「やば…息が」

コナンは一瞬気管が狭まった気がして、その場にしゃがみこんだ。と、そのとき哀が起きてきてコナンに気づき、慌てて駆け寄る。

「工藤くんっ！？ …… 苦しいの！？」

目を堅く瞑り、肺をおさえてハアハアと荒い呼吸を繰り返すコナン。哀は彼の額に触れてみた。

「すごい熱じゃない！」

「…っぐ、っふ…ゲホッゲホッ！げっ…ふ」

哀が額に触れた瞬間、突然苦しそうに咳き込むコナン。喉の奥に何かがひっかかったときのように、必死にそれを排出するように嘔せ返る。

途中咳のし過ぎで嗚咽が漏れ、気管支からは呼吸をするたびに、痰が行ったり来たりするようにゴロゴロ、ガラガラとあり得ない音が鳴る。

「ゲホッゴホゴホッ！…はあっ、はあっ…」

「工藤くん…痰がまだ残っているから、なるべく大きく息をして。嗚咽が漏れてもいいから、たくさん咳をして痰を出して頂戴。全部

出さないとまた呼吸困難になるわよ」

哀はコナンの背中を叩きながら耳元でささやく。コナンはそれに応えるように大きく息を吸い込んだ。その際に残っていた痰がまた気管を刺激して激しく咳き込む。

しばらくの間、この動作を繰り返し、コナンがやっと落ち着きを取り戻したのは約10分経ってからだった。

哀によって強制的にベッドへと戻されたコナンは布団の中で縮こま

っていた。

「熱、どんぐらいあった…？」

数分前に体温計が鳴ったのだが、その時はまだ声が出せなくて聞けなかったから今再度哀に確認するコナン。哀は冷たい水に浸したタオルを絞り、コナンの額に乗せながら答える。

「39.8度。どう考えても異常よ。それにさっきの咳だって…一歩間違えれば貴方、窒息死してたところよ」

「あ、ああ…。あ、あれは俺もさすがに死ぬかと思った。咳は初めての症状だしな。今も少し息苦しいし…」

そう言うってからコナンは胸をおさえてゆっくりと息を吸った。まだほんの少し気管からぜいぜいといった音が鳴っているようで哀は顔をしかめる。

「まだ奥の方に残っているのね。気持ち悪いのなら取ってあげるけど…」

哀は長くて細いチューブのようなものを取り出し、コナンに見せた。医療の現場で使われる、カテーテルといったものだ。

コナンはぎょっとして首を横にぶんぶんと振る。

「そこまでしなくていい…吸引のこと言ってるんだろ？自力で取れるから大丈夫…」

哀は必死なコナンを見て鼻で笑う。

「クスッ…わかってるわよ。意識のある貴方にそんなことはしないわ。第一、資格のない私が吸引なんて医療行為をしたら犯罪になるでしょ？」

「… なっ、おまつ… わかってて言ったな。病人で遊ぶとか卑怯だぞ」

そう言って数回咳き込むとジト目で哀を見つめた。

「悪かったわね。まあ顔色も少しは良くなってきたみたいだからもう少しだけ寝て、次起きたら何かお腹に優しい物でも食べさせてあげる。とりあえず、今は熱が高いからさっさと寝なさい」

哀はそう言い放つとそそくさと部屋を出た。

「… 相変わらずかわいくねー女」

哀が出て行ったあと、コナンはそう呟き、再び眠った。

「おかしい。絶対に何かがおかしい…」

部屋から出た哀は地下室のパソコンでアポトキシンの成分について
思い出せる範囲で調べていた。

明らかにコナンの様子がおかしい。冗談で吸引の話をしたが、あな
がち冗談では済ますることが出来なくなる日が来るかもしれないのだ。

コナンの体調は日に日に悪化してきている。話を聞くと、頭痛から
始まり、その症状は日々重くなっていることがわかる。

頭痛、眩暈、吐き気、発熱ときて、先ほどのあの激しい咳き込みと
喘鳴、呼吸困難、そして高熱。ただの風邪でこんな症状は見たこと
がなかった。

まさかとは思ひ、いや信じたくないしこんな考えがよぎった哀自身も恐怖で先ほどからキーボードに触れる指先が小刻みに震えているのだが、その考えについて間違っていることを信じ、確認作業中なのである。

「私たちって…普通なら死んでいるのよね」

それまで黙って動かしていた指をいきなり止めて、ポツリとつぶやく。そして口元に切なげな笑みを浮かべる哀。

「だとしてもこんなの…あんまりよ。彼は、関係のない人間なのに…」

そして、哀の目から光るものが溢れた。

「罰を受けるべく人間は…私一人で十分じゃない…っ」

一粒だった光が、次々とこぼれては落ちていく。

「…ごめんなさい、工藤くんっ……」

耐え切れず、その場にしゃがみ込んで、掌で瞳を覆う哀。指の間からは涙が溢れて、床に染みを作っていた。

06（後書き）

哀ちゃん切なすぎます。

作者も片思い中なので、気持ち痛いほど分かります（笑）

では次回もお楽しみに（＊、ω、＊）

07（前書き）

前回、哀ちゃんが泣いていた理由を明かします。

哀が導き出した答え。それは、” A P T X 4 8 6 9 の毒の作用が今更身体に周り出し、結果として様々な体調の異常を引き起こす”。

——副作用という形で。

そもそもアポトキシンを服用した者は飲んだその直後に死亡するのがほとんどだが、コナンや哀のように稀に幼児化という代償を残しはするが、生き長らえることが出来る事例もある。

だが、元々はヒトを死亡させることの出来る猛毒であるアポトキシ。幼児化という代償だけでなく、後からちゃんと副作用として症状が徐々に現れることが明らかになった。

そして、その副作用が現れた人間の末路、それは——死のみである。

哀は全身が氷のように冷たくなっていく感覚に襲われている。
寒くて寒くて、勝手に震える身体を必死に抱きしめた。

「ごめんなさい…ごめんなさい…」

壊れたロボットのようにな度も同じ言葉をつぶやく哀。

哀がこの結論に達することはそれほど難しいことではなかった。副作用じゃないという証拠を探していたら、自然とこうなってしまうから。

そう、証拠なんてどこにもなかった。探せば探すほど、アポトキシンの脅威がコナンの体調悪化に関係があるという事実だけがどんどんと浮き彫りにされて、残ったのは、最も恐れる最悪な結果。

「工藤くんを死なせるわけにはいかない…。彼を助けなきゃ…」

再び立ち上がった哀はパソコンに向き合った。

この瞬間から、哀の愛する人を助けるための研究が始まったのだった。

その頃、コナンはこの日二度目の睡眠から目覚めたところだった。

「ん…あ、息できてる」

コナンは眠る前の息苦しさから解放されているのを確認すると自然に笑みがこぼれていた。熱も下がり、今のところ頭痛もない。胸の痛みも、気管の違和感も感じられなかった。

いたって健康な体に戻った。

コナンはそう思い、ベッドから降りてリビングへと向かった。

リビングには博士がテレビを見ながらくつろぐ姿があった。コナンは博士に近づき、ソファに座る。

「おお、新一。気分はどうじゃ？」

「ああ、だいぶいいよ。博士、今日はいったん探偵事務所に戻るわ」

コナンはそう言って、荷物を抱え玄関の方へと歩いていく。博士はそれを慌てて止めようとした。

「だ、だめじゃよ、新一っ！まだ完全に治ってないだろう！安静にしとかんとっっ」

のっしのっしとコナンを追いかける博士。その姿はどうみても老人

にしか見えないのがなんとも気の毒な話なのだが、彼はこう見えてまだ50代なのだから驚きである。

コナンはそんな博士を見て、思わず嘖き出す。

「ぶっ…くくくっ…」

博士はせっかく心配しているのに笑いだすコナンを見て、少し不機嫌な顔になる。

「な、何がおかしいんじゃ、新一…」

「わ、わりいわりい…必死すぎる博士見たら何か笑えてきてよ…。まっ、大丈夫だから。それより蘭が心配すっから今日は帰るよ。灰原に礼言っといってくれよ。じゃあな！」

コナンはそう言つと博士の家をあとにした。博士はやれやれといった表情でコナンの後ろ姿を見つめていた。

「ただいまーっ！」

コナンは探偵事務所のドアを開けると勢いよく挨拶した。

が、そこにいたのは小五郎だけで、蘭の姿がどこにもなかった。

「よお坊主。蘭なら今はいねえぞ。空手の練習に行ってるってよー」

「あ、そうなんだ」

コナンはそう返事をする、いったんドアを閉め、自宅の方へとあがっていく。荷物から洗濯物を出し、洗濯機へと放り込み、その他の荷物は小五郎兼自分の寝室へと片付けた。

そして適当に推理小説を手につけて、また事務所の方へと向かった。ドアを開けるとイヤホンを耳に押し込み、新聞と必死に睨み合いをしている小五郎の姿があつてコナンは苦笑した。

「（ハハ…また競馬かよ）」

内心そう思いながらコナンは持ってきた小説をソファの上で仰向きになりながら読み始める。

実は途中だったこの本。今まで体調が悪かったせいでろくに読めなかったが、今なら読めると思つてコナンはわくわくしながら読み始めたところだった。

久しぶりの穏やかな時間。こんな日がずっと続けばいいのにと、コナンは願つた。

07（後書き）

感想やメッセージありがとうございます（＊、＊、＊）
次回もお楽しみに♪

08（前書き）

そういえば来月にいよいよ去年の映画、「沈黙の15分」^{クォーター}のDVDとBDが発売されますね！

あ、それと12月には4枚目の主題歌アルバムも出るそうです（＊
ω、＊）

もちろん私は2つとも初回限定版をゲットしますよーwww

てなわけでお知らせ兼前書きでした（笑）

コナンが探偵事務所に戻って数時間後、哀はコナンの様子を見ようと地下室から出てきた。

「ねえ、博士。工藤くんは？」

博士は若干気まずそうに答える。

「それがその…蘭くんが心配するからと言って、事務所に…」

「まさか、帰っちゃったの!？」

哀は博士の言うことを先読みし、問い詰める。

「あ、ああ……まあ、出て行ったときはすっかり体調も良くなっていたようじゃし……」

「何呑気なこと言ってるの！あの症状を見て、博士は何とも思わなかったの！？早く彼を連れ戻さないと今度こそ蘭さんに言い訳できなくなるわ……」

博士はあまりの哀の慌てぶりに、どぎまぎする。

「哀くん…蘭くんに言い訳できなくなるって、どういことなんじゃ？ 新一は何かの病気なのか…？」

哀はしばらく考え込んだ末、博士にだけは伝えようと思った。

「博士、工藤君は…このまま放っておいたら、確実に死んでしまうの」

「…な、なんじゃとおっ!？」

阿笠邸に、博士の悲鳴が響いた。

*
*
*

「……あれ？」

コナンは目をこすった。

「……え？」

何度も何度もこすった。
…けれど。

「まじかよ。やべ…」

先ほどまで何の問題もなく読んでいた推理小説の文字が今、どうしようもなく歪んで見える。

「（…蘭が帰って来る前に博士んちに行かねーと…）」

そう考えて立ち上がった瞬間、外から足音が聞こえてきて、

「ただいまー。あ、コナンくん！帰ってたのね」

空手の練習を終えた蘭が、買い物袋をたくさん抱えて帰ってきた。

「あ、…おかえり。蘭姉ちゃん…」

こうしてコナンの長い夜が、始まった。

*
*
*

「私のせいで、工藤くんを死なせるわけにはいかないの。博士、探偵事務所に電話して。工藤くんを連れ戻して」

「哀くんのせいって…そんなに自分を責めるでない。第一蘭くんだって不自然がるじゃろう？一度は帰ってきたコナンくんがまたワシの家に行くなんて。どう説明するつもりなんじゃ？」

哀は博士に全てを話した。

博士は話を聞いたときは酷く驚いたが、自分が冷静でいなければと気を奮い立たせた。

哀の言っていることが本当ならば、一刻も早く蘭とコナンを引き離さなければ、コナンの正体も副作用のことも、全てが明るみになることになる。そうなれば組織に居場所が知られ、周りの人間にも危害が及ぶ。

そして、コナンがいずれいなくなってしまうかもしれないという事実、蘭が耐えられる保障はどこにもない。

「蘭さんには悪いけど、言い訳なんて考えてられないわ」

哀はそう言ってパーカーを羽織ると、外に飛び出した。

「あ、哀くん！待ちなさい、哀くん！」

博士も続いて哀を追いかけた。

阿笠邸の塀の上で、2羽の鳥がその光景を眺めては不気味に佇んでいた。

08（後書き）

さて、いろいろと事が動き出しましたよ（笑）
これからもどうぞお楽しみにしてくださいっ

ちなみに前書きで言ってたやつが発売日なんですが、

DVD／BDは11月23日、CDは12月14日だそうです（＊

ω、＊）

ちなみにCDの初回限定版にはDVDもついてるらしいので私は予約するつもりですっ
ww

09（前書き）

次回から前書きは省きます

えーっと、宣伝で申し訳ないのですが、
友達が二次小説のサイトを立ち上げたので
お知らせしますww

mixi内の機能らしいのですが、
mixiをしていない人でも見れるみたいなので
ぜひ見てやってください（*´ω`*）

http://page.mixi.jp/view_page.pl?page_id=173836

あ、このページにはすでに
いくつか小説が紹介されているので
もしも自分の小説が載ってて、
それを見て不快な思いをした方がいれば
私に連絡ください！

私から友達に消してもらおう言いますので><
あ、逆に載せてほしい方も
私に言ってください^^w

ではでは本文へどうぞ！

哀は走った。

いつの間にか空は灰色に覆われていて、今にも雨が降り出しそうだ。

ふと後ろを振り返ってみると、博士が汗だくになって追いかけてくるのが見えた。

けれど、申し訳ないが止まる気はない。

今、自分がしなければいけないこと、それは彼の元へ辿りつくことだから。

哀が必死になって走っていると、やはり雨が降ってきた。

最初は小雨だったのが、段々と本格的に降り出すようになって、アスファルトがどんどん濡れていく。

走る度に水たまりが弾け、哀の足元を濡らしていった。

「きゃっ…！」

水たまりに足が入った瞬間滑り、派手に転んだ。

地面に強く膝を打ち付けたようで、うつすらと血も滲んでいた。

哀はその傷を眺めながら切ない表情を浮かべる。

「まるで、あの日に戻ったみたいね…」

思い出したくない記憶が蘇ってきて。

組織から抜け出したあの日。

烏が気付く前に、追って来る前に…

逃げて、逃げて、転んでもまた立ちあがって。

必死になって走った、あの時のようで。

ふっと微笑み、立ち上がろうとした刹那、背筋が凍る感覚がした。

恐怖で震える身体をひしと抱きしめながらそっと振り返ると、歯をむき出してせせら笑う烏が一人。

「逢いたかったぜ、シェリー……」

風でなびく銀髪が、やけに綺麗に見えた。

「ジン……っ……！」

涙目でその男をしつかりと見据えた。

「蘭姉ちゃん…、僕、博士ん家に忘れ物…」

コナンは何とかこの場から離れようと必死に言い訳を並べていた。だが、世話好きかつ心配性の蘭は、それを許さなかった。

「何言ってるの。もう夜なんだから、明日でもいいでしょ！」

「でも…今日、今から必要なものなんだっ…」

こうしてる今も、着々と発作の兆しが見え始めている。

目は先ほどよりも霞んでいて、うつすらと額からは汗がにじんでいる。

指先が小刻みに震え、息が苦しくて無意識に胸をおさえた。

そしてコナンのそんな浪漫な動きを見て、蘭は気づいてしまった。

「あれ？コナンくん、ちょっと黙って！」

びくつと反応したコナンの額に、そつと触れる蘭。

コナンは内心諦めた。
その心の緩みによって、張っていた気も緩み、一瞬頭が真っ白になる。

コナンの額の熱さに圧倒された蘭は、コナンに声を掛けようとしたが、そのときコナンの身体が大きく揺れ、重心が後ろに持って行かれた様子のコナン。

蘭はすばやく両腕でしっかりと受け止め、そのまま抱き寄せた。

ぐったりと体重を預けるコナンに、蘭はぎよっとする。

「こ、コナンくん…?」

目は虚ろで、息は荒く、額からは汗が噴き出していた。

「コナンくんっ！……!」

悲鳴のような蘭の声を、薄れゆく意識の奥で聞きながら、コナンはそのまま闇に落ちていった。

09（後書き）

こついうコニヤを描くのはとても楽しいです、はいwww

これからどんんはあはあしていく江戸川が見れると思いますよ
（*、*、*）

楽しみにしててねっゝてへぺろ
↑

ではまた次話で会いましょう*

次話から前書きは省きます

「コナンくんっ！！！！」

意識を手放したコナンはぐったりと蘭に体重を預けた。

蘭はそんなコナンを素早く寝室に運び布団に寝かせると、まず体温計をコナンの脇に挟み込み、優しく布団をかけた。

「大丈夫よ、コナンくん…すぐに楽にしてあげるから！」

勢いよく寝室を出て台所に向かい、洗面器に水を張る。
同時にタオルを濡らして適度に水を含んだまま絞る。

タオルと水が並々に入った洗面器を持って、再び寝室へ上がるとコナンの元へ駆け寄った。

「コナンくん…すごい熱じゃないっ」

真っ先に体温計に目をやると、そこには39.8という数字が並んでいた。

冷たい水を含んだタオルをコナンの額に乗せ、その他にも脇の下や股関節など動脈が通っている部位に次々と冷たいタオルを挟み込み応急処置を施す蘭。

その処置は以前、蘭が熱を出したときにコナンが行ったものだった。

動脈や静脈など大きな血管が通っている部位を冷やすことにより、冷やされた血液が全身に回り体温を効率よく下げることができるのである。

こうして出来る範囲で全ての応急処置を終えた蘭は、コナンの手を握り寄り添った。

「コナンくん…、どうして無理するのよ。辛いなら辛いって言えば、こんなに酷い風邪にならなくて済んだのに」

そう呟いた瞬間、コナンの胸が大きく動いた。

「…っぐふ」

息を吸い込んだ瞬間、気管が詰まったのかコナンは苦しそうに喘ぐ。

「コナンくんっ！」

「っ…は、あ…っふ」

「しっかりしてっ、コナンくん！―！」

胸をぎゅっと押さえるコナンをゆっくりと起こして背中を叩いた。

「…っがは、ふ…ゲホッゴホッゲホッ…」

ようやく気管を塞いでいた妙な感覚が取れ、欲していた酸素を勢いよく吸い込むと、それと同時に排出された空気との摩擦により激しく咳き込んだ。

時折嗚咽も漏れ、吐き気も相当あるようで気持ち悪さに顔をしかめるコナン。

そんなコナンを見て蘭はただただ動揺を隠せずにいた。

狭い路地に、小さな女の子と黒服に身を包んだ銀髪の男が佇んでいる。男を「ジン」と呼んだ少女は完全に追い込まれていた。男の手には拳銃が握られており、反発など許されない。

——哀は震える身体を必死に抑え、平常を装う。

「そんな怯えた瞳をするなよ、シェリー……。お前らしくないな……」

「あら、私がそんなに弱々しい女だと思っているの？別に怖がっているわけじゃないのに。…歓迎して、くれるのよね？」

「ああ。お前次第だな」

そう言った後、引き金に指を掛けるジン。

「さあ、来い。あのお方がお待ちだ」

——今ここで逃げようとするならば、確実に撃たれる。だが組織の研究室に帰ることができたらアポトキシンを持ち出すことができ、その成分を正確に読み取ることができたなら、コナンを救う特效薬を作ることができるかもしれない。

そう確信した哀は、ジンに言われるがままポルシェに乗り込んだ。

「（工藤くん…待ってて、必ず助けるから）」

10（後書き）

今回もお読みいただきありがとうございます

コニヤと哀が別々の場所で

何やら大変なことになってきましたw

書いてる私も

かなり楽しんじゃっています（*´ω´*）w w

読者のみなさまも

楽しんでいただけてますでしょうか？
♪

それではまた来週会いましょうっ（*´、´*）

博士はいつの間にか哀の姿を見失ってしまった。辺りをキョロキョロと見回してみてもどこにも見えない。

胸がざわざわして、胃も痛くなる。嫌な予感がしてならなかった。

「あ、哀くん…いったいどこに行ったんじゃ…」

博士は哀が走っていった理由を思い出し、探偵事務所までの道をくまなく探すことにした。

すると、三つ先の角に小さな人影を見つけた。

「哀くんっ!」

博士はほつと安心して、駆け寄ろうとしたとき、哀の姿が消えた。慌てて走り出し、哀が居た角に到着した博士が見たものは、燃費の悪そうな真黒な車に乗り込む哀の姿だった。

「あ…っ」

あまりの衝撃に上手く声が出ず、情けなく震える吐息に似た声を発した瞬間、その車のドアはパタンと閉まり、そのまま発進してしまった。

「あ、あれは…、ポルシェ356Aっ！…あ、あ…哀くんっ！！！！」

しん、と静まり返ったその場に、博士の悲痛な叫びが響いた。

*
*
*

その頃、探偵事務所ではコナンの背中を必死になって摩る蘭の姿があった。

「コナンくんっ…」

コナンは胸を強くおさえて、激しく咳込んでいた。
気管から分泌された痰がゴロゴロと音を立て、呼吸を妨げる。どれ
だけ咳をしても、嗚咽がこぼれようと、一向に痰が切れる様子は
ない。

「げほっ げほっ げほっ … うっ」

コナンは胃からこみ上げてくるものを必死に飲み込もうとする。だ
が咳によってその行為も妨げられ、ついには嘔吐までしてしまった。

「コナンくん…っ！だ、大丈夫…、我慢しないでっ！これ…ここに
吐き出して」

蘭はビニール袋を取り出し、コナンの口元に持っていった。同時に
背中を何度も叩いて呼吸を促す。

「落ち着いて…、ゆっくり深呼吸してごらん」

コナンは蘭の言う通り、ゆっくりと息を吸った。コナンの気管に留まる痰はゴロゴロと蘭の耳に聞こえるくらいの音を立てる。コナンは息を吐く。またも痰は音を立てる。

「コナンくん、まだ苦しいね…」

蘭の言葉を意味のある言葉として認識できていない様子のコナン。虚ろな目で蘭を見上げ、ふわりと笑った。

その途端、また激しい咳が再発し、嗚咽と嘔吐を繰り返す。

見かねた蘭は、携帯で救急車を呼んだ。

「コナンくん、今救急車呼んだからね！すぐ楽になるから…っ」

すると事務所の方からバタバタと慌てて小五郎が入ってきた。

「おい蘭っ…救急車って…坊主どうしちまったんだっ」

「わからないっ…でも、咳が止まらないの…っ！さっき嘔吐までしちゃったし、胸だっておさえて…。私っ…コナンくんがこんなに苦しんでるのに、何もできない…っ」

そう言う蘭の目からは不安と恐怖と困惑が入り混じった涙が溢れた。小五郎はそんな蘭を見て、乱暴に蘭の肩を揺さぶる。

「しっかりしろっ！今一番泣きてえのはお前じゃなくて、こいつだろっ！」

その言葉にはつと息をのんだ。そしてゆっくりコナンを見る。肩ではあはあと息をして、苦しそうに胸をおさえるコナンの姿にまた泣きそうになる。が、小五郎の言葉を受け止め零れた涙を拭い、優しくコナンの背中をさすった。

そのとき、救急車のサイレンが聞こえてきた。蘭はコナンを両腕で抱え、急いで外に出た。

やがてやってきた救急隊員にコナンの症状を伝えると、救急車に乗り込み、コナンをストレッチャーに乗せたあと隊員たちはコナンに応急救置を施す。

まず聴診器で胸の音を聞いた隊員は顔をしかめ、近くの隊員たちと
ごそごそと言葉を交わす。

そしておもむろに棚を探り、中から細い管を取りだした。

コナンに口を大きく開けるよう指示をすると、隊員はその管をコナ
ンの口腔に挿管した。

気管の奥へと進む管の刺激のせいで激しく嗚咽をもらすコナンに対
し優しく声を掛ける隊員たち。蘭も便乗して声を掛けながら、小刻
みに震えるコナンの小さな手を包み込むように優しく握った。

気管にまで到達した管からは、コナンを苦しめていた痰が吸引され、
全て排出された。

役目を終えた管はするするとコナンの口腔から出され、再び隊員は
聴診器で胸の音を聞いた。

「よし、もう大丈夫だ。よく頑張ったな、坊主！」

そう言って、汗でべたついたコナンの頭をがしと撫でた。

熱のせいで朦朧とした意識の奥で、コナンは胸の不快感が取り除かれたことに安心し、静かに目を閉じた。

11（後書き）

前にも一度言いましたが、

私医療については少し詳しいんで

これから結構そういう場面が増えると思います。
治療のシーンだったり。

そっというの苦手な人もいると思って

15禁に設定したんですよ（´ω｀;）

なので苦手な人は自己責任でお願いします。

ではまた次回でお会いしましょうっ ♪

来週は私情のため投稿をお休みします。

2週間後の土曜日には投稿できると思いますので、
ご了承くださいっ ><

ココハ、ドコ…？

真ッ暗デ、何も見えナイヨ…

ボクハ誰ナノ？

「だ…め、コナ…く…」

聞コエナイヨ。

貴女ハ、誰？

モウ、何も聞コエナイ、見えナイ。

…ゴメンネ。

「ナン…ん、コ…くん…、コナンくんっ！」

額に汗で濡れた髪の毛がべったりと張り付く気持ちの悪い感覚と、普段聞き慣れた優しい女性の声によって、ゆっくりと覚醒されていく意識。

コナンは身体の熱さとたるさに顔をしかめながら徐々に目を開いた。

「あ、コナンくん！目が覚めたのね！大丈夫…？」

「らん…？」

朦朧とする意識の中で、声がする方へと必死に手を伸ばした。

「コナンくん、私はここよ。心配しないで、ずっとそばにいるから」

そう言つて蘭は、小刻みに震えるコナンの手をしっかりと握つて応えた。

コナンはあれから救急車で意識を失い、病院に着くなり車内では行えなかった様々な応急処置をされた。

呼吸困難に伴う酸素濃度の低下が見られたため口元には酸素マスク、指には酸素濃度を測る特別な機械、解熱剤と抗生物質の点滴、心電図…。

また、40度を超える高熱のため、頭と脇の下、股関節など動脈が

通る個所に氷を挟み、その横では蘭が必死に看病を行っていた。

「コナンくん、どこか苦しいところない？」

優しい問いかけに、コナンはゆっくりと口を開く。

「あ、少し頭が痛いけど…大丈夫だよ」

そう言ってコナンは点滴されていない方の手で頭をおさえた。

「そう…。あ、じゃあお医者さん呼んでくるね！」

蘭は病室の扉をゆっくり開け、ぱたぱたと走っていった。

「っ…」

頭痛が、段々と酷くなっていく。

またあの発作がくるのか。コナンは確信し、どうにか落ち着かせようとゆっくり深呼吸してみたが、コナンの意識とは裏腹にどんどん症状が出てきた。

「くそ…熱が上がってきやがった…っ」

片腕で額を覆ってみたが、先ほど目を覚ましたときに比べると明らかに体温が上がっているのが分かった。

そうすると次に来る症状は…

「くあ…っ」

予想通り、コナンは胸をおさえながら苦笑した。
蘭が医者を呼びに行っただのが幸いだったが、もし発作が治まる前に戻ってきてしまったら、厄介なことになる。

コナンは点滴の針を無理矢理抜き、心電図と指の機械を外して病室を後にした。

とりあえずその場凌ぎにしかないが、トイレに向かう。
個室のトイレに入って、鍵を閉めた途端、さっきまでいた病室から蘭の慌てた声が聞こえてきた。

「あつぶねー。間一髪…」

胸の痛みが取れるまで、ここで大人しくしていよう。
そう思った瞬間、またどくんと波撃つような動機が襲ってくる。
立っていられなくなったコナンは崩れるようにしてその場にしゃがみ込んだ。

一方その頃博士は、哀が連れ去られた現場で茫然としていた。

「し、新一に連絡しないと…っ」

やっと我を取り戻した博士は携帯電話をポケットから取り出し、コナンの携帯に掛けた。

数回のコール音がして、すぐに留守電に切り替わる。

「何をやっておるんじゃない…こんなときにつ…」

焦りからか指がどうしようもなく震える。仕方なく毛利探偵事務所の方へも連絡を入れたが、結果は同じだった。

「困ったのう…哀くんっわしはどうしたらいいんじやっ…」

すると通りの向こうから、小さな女の子の姿が見えた。女の子は博士の姿を見つけると、大きく手を振りこちらへ走ってきた。

「はーかーせーっ！」

「あ、歩美くん…っ」

歩美は買い物の帰りなのか、袋を両手にさげていた。

「どうしたの、博士。こんなところで」

歩美の問いにどう答えるか迷っていたら、探偵団バッジが目にとまった。

「あ、歩美くんっ…ちょっとの間だけバッジを貸してくれんかのう？」

「え、うん。いいよ！…はい！」

そう言っただけで歩美は博士に自分のバッジを手渡した。博士は受け取ると自宅の方へと走っていった。

12（後書き）

お待たせしました！

先週は大学の学園祭があつたため

御休みさせていただきましたが、

本日は無事に投稿することができました（＊、ω、＊）

博士が走ってますw

どうするのか大体予想はつきますか？w

なにはともあれ

次回もお楽しみにしてくださいねっ（＊、＊、＊）

「おい、シェリー」

「なに？」

燃費の悪そうなボルシェ356Aに乗っている男女2人。長髪で冷酷な笑みを浮かべている男——ジン。

その場に相応しくない格好をして、それでもジンに弱みを握られまいと冷たい瞳でジンを見つめる少女——哀。

「——お前…、いつも一緒にいた眼鏡の子供とは、どういう関係

だ？」

“眼鏡の子供”

その言葉を聞いて哀は背中が凍りつくような感覚がして、身震いした。

「眼鏡の…子供？ さ、さあ…知らないわ」

哀は冷静を貫き通す。だが、もう無駄であることは内心解っていた。

「とぼけるな」

ジンの鋭く尖ったナイフのような視線が哀を貫く。

「…そうやって私に尋問するけど、本当はもう解っているんじゃない?。」

それでいてなおも冷静に対応する哀を見て、ジンは不敵な笑みを浮かべた。

「その顔、やっぱり解っているのね。お願い、彼は関係ないの…手を出さな…っ」

「奴は、組織が手を下すまでもない。直に、くたばるからな」

哀の言葉を遮って呟くジンの言葉には、感情というものがない、機械が発している言葉に聞こえ、哀は全身に鳥肌が立つような気がした。

——哀が導き出したコナンの最期に、偽りはなかったと、この瞬間知らされたから。

*
*
*

その頃博士は自宅へ帰り、あるものを探していた。
見つかることを願わずに、そこにないということを願って。

「よかった…持っておるんじゃない。哀くん」

いつもの引き出しの中には、予備の追跡眼鏡のみが入っていた。

ここにあればその意味を成さないもの。

博士はゆっくりと自分の手元を見た。

「新一に、連絡しよう…」

バッジを操作する指が震えた。

——もし、これで応答がなかったらどうする？

頭の中で何度も問い詰める。自分に向かって。
それでも、答えは見つからなかった。

——ただこの時ばかりは、コナンの声を求められずにはいられなかった。

「——はい、コナンですっ…」

「じ、新一っ…！」

だが聞こえてきたコナンの声は、弱々しく震えていた。

*
*
*

トイレの中で発作が治まるのをただ待っていたコナン。

しゃがみ込んでいる体勢も、正直言つてとても辛かった。
ぎゅっと目をつぶり、胸の痛みをこらえる。

そのとき、かすかな電子音が聞こえてきた。

ズボンのポケットに手を入れて、音のなっているそれを取り出す。

応答しても声が出せる保障はなかったが、なぜか応えなければいけない気がした。

そして、応答のスイッチに触れた。

「——はい、コナンですっ……」

「し、新一っ…！」

聞こえてきた、今にも泣きそうな老人の声にはっとした。

「は、博士…？ど、どうしたんだよ、そんなに慌て、てっ…」

喋っている途中で息が続かなくなった。胸に手をあて、肩で激しく呼吸をする。

頭の中がぐるぐると回っている。目を開けると、見えている景色がぐわんぐわんと揺れていた。

たまらなくなつて、込み上げた不快感に耐え切れず口元に手をやった。

それでもバッジのスピーカーから聞こえてくる博士の声に応えようとした刹那、喉に異変が起き噎せ返ってしまった。

「っごほ…げほっげほごほっ…！」

「新一っ…どうしたんじゃっ！新一！」

咳を治めようと息を止めてみたが、すぐに苦しくなつてまた咳き込んだ。

苦しくて、反射的にうつすらと涙もにじんできた。

しばらく経って少しずつ落ち着いてきたが、意識は今にも飛びそうだった。

なんとかして博士と会話しようと試みたが、声が思うように出ない。

「は、博士…わ、りい…。聞いてるからっ…用事、なんだっただか…言ってくれ」

バッジの向こう側にいる博士は、戸惑いながらもコナンの言う通りにした。

「じ、実は…哀くんがっ…」

その先の言葉を聞いたコナンは、全身から血の気がひいていくのを感じた。

”哀くんが、組織にさらわれた”

言葉を言葉として捉えるよりも先に、コナンは立ち上がり、走り出した。

13（後書き）

おはこんにちばんわ（＊´ω＊）w

23日発売のDVDを

ひたすら見続けている作者が通りますよーってww

いやぁ、いいですね。

あ、来年の映画のタイトルが
とうとう発表されましたね（＊´、＊）

「11人目のストライカー」

4月14日から全国ロードショーですよ

私は早くも友達に誘われて
一緒に見に行くことが決まってます（＊＾ω＾＊）

楽しみで楽しみで
仕方がありませんね♪

それではまた次の更新で
お会いしましょう(●^o^●)
ノシ

——放課後。

元太、歩美、光彦は公園で話していた。

「歩美、それ本当かよ？」

「うん！すごく焦ってたよ。歩美がバッジを渡した瞬間、すごい勢いで走っていったし……」

「何かあったんでしょうか……。コナン君や灰原さん今日も学校に来ていませんし……」

コナンは昨日、体調不良のため早退して今日も欠席しており、コナンの後を追った哀も、同じように学校を休んでいる。
また先ほど、歩美の元にやってきた博士のことも気になって、歩美は今ここにいる2人に話したところだった。

「あいつら、また何か俺らに隠し事してるよな」

「ええ。抜け駆けはコナン君の得意技ですからね」

「で、でも…学校休んでまでする隠し事って…。歩美たちが知っていいことなのかな？」

「「え？」」

歩美が発した意外な言葉に、元太と光彦は同時に歩美の顔を見た。

「なんか…いつもの博士じゃなかったから。なんていうのかな、すごく辛そうな顔してたの。歩美だって気になるよ。歩美に出来ることなら協力したいって思ってる。けど…今回は何だかいつものノリでやつちやいけない気がして…」

「首を突っ込まない方がいいってことですか？歩美ちゃん…」

「…うん。そんな気がする」

「でもよー、そんな根拠どこにあるんだよ？」

元太に聞かれた歩美は、しばらく考え込んだ。そして元太をしっかりと見据えて言った。

「…女の、勘よ。とにかく、博士たちを信じよう…?」

歩美の今までにない真剣な表情を見た元太と光彦は、静かに頷いた。

*
*
*

「灰原…っ！灰原…、はあ…っはあっ…」

博士からの連絡を受け、発作が起きているにも関わらず病院を飛び

出した。

胸が苦しかった。今にも息が止まりそうなほど。でもコナンは止まることなく走り続けた。

途中誰かにぶつかり、声を掛けられた気がしたが、そんなの今はどうでもいい。

ただ、早く博士の元へ…それだけしか頭にはなかった。

しばらくすると数メートル先に、見慣れた老人の姿が見えた。

視界に霞がかかったと思ったら、身体が急に揺れた。

「新——っ！！！！！！」

コナンは壁に手をつき、崩れるようにしてその場にしゃがみ込んだ。

息は荒く、顔は熱のせいで真っ赤に染まっていた。

汗で前髪が額にへばりつき、身体中が痛くて悲鳴を上げている。

そこへ博士が駆け寄り、コナンを抱き上げた。額についた前髪を掻き上げて、その体温を感じると、博士は驚愕した。

「す、すごい熱じゃないか！新一っ！」

「そ、それより……っ灰原は……っごふっげほっごほっがはっ！」

喉が詰まり、耐えきれず咳き込む。

博士はコナンの背中をさすりながら簡潔に言う。

「組織に、さらわれた。ポルシェ356Aに乗るところをこの目で見てしまったんじゃない。とりあえず、一旦家に入るぞ」

そう言う博士はコナンを抱き上げたまま阿笠邸に入っていった。

——影からこっそりと見つめていた小さな存在にも気付かずに。

14（後書き）

どーも（`、*）
作者ですww

どうにか今週も
upできました！

最近忙しくて、
なかなかストック書けなくて…

でも空いてる時間見つけては
ちょこちょこ執筆してるんで

この更新が止まることはありません♪

楽しみにしてくださっている方が
どれくらいいるのか分かりかねますが、
そんな大切な人たちの期待を
裏切るようなことはしませんので、
安心してくださいね（*`、*） w

えー、

この14話なんですけど、
最後にコナンと博士を見つめていた人たちの正体、
気になりますか？なりますよね？www

いや、もしかしたら

勘の良い方は気づいてらっしゃるかも？w

なにはともあれ、

次週明らかになると思われますので

また楽しみにしててください（*^ー^*）

ではまた次話で

お会いしましょう（、*）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0447x/>

love song -あいのうた-

2011年12月3日17時45分発行